

# ジャンル、ディスコース群、スタイルの関係について

## ——フェアクラフ理論による社説とコラムの批判的ディスコース分析——

石 上 文 正

### 〈キーワード〉

- ①社説とコラム    ②起承転結    ③ジャンル（一般的）構造    ④ディスコース群構造  
⑤スタイル構造

### 〈論文要旨〉

フェアクラフは、ジャンルは、特定の方法でテキストの全体的構造を決定する。と述べている。『日本経済新聞』の「春秋」（2014 年、11 月 22 日）と「社説」（2014 年、11 月 23 日）の分析を通して、この点について考察した。二つのテキストそれぞれにおけるジャンル、ディスコース群、スタイルの 3 構造を比較した結果、それらの間には類似した構造が認められた。このことから、ジャンルが、テキストを構造化していることが示唆される。

「春秋」と「社説」は、Fowler が「社説」の特徴を示すと考えている次の 4 点——①感情的な語彙が使用され、②話者の主張がモダリティに示され、③記述的な命題や諺などの一般的陳述が示され、④論争的である——において、正反対の特徴をもっていることがわかった。このことからこれら二つのテキストは、正反対のジャンルに属していると考えられる。

# The relationship between genres, discourses and styles:

## critical discourse analysis of a newspaper editorial and column using Fairclough's theory

Fumimasa ISHIGAMI

### 〈Key Words〉

- ① editorial and column  
② discursial process of introduction, development, turn and conclusion  
③ genre (generic) structure    ④ discourses structure    ⑤ style structure

### 〈Abstract〉

Fairclough states that genres structure texts in specific ways. Using Fairclough's theory and Fowler's ideas, I examined the relationship between genre, discourses, and style in a column and an editorial in the *Nihon Keizai Shimbun*, Japan's leading economic newspaper.

The examination found that genre, discourses, and style were of a similar structure in each text but differed in structure when comparing one text with the other. The results support Fairclough's theory that genres structure texts in specific ways.

My analysis also found the column and editorial to have opposite characteristics with regard to features mentioned by Fowler, such as use of 1) emotive vocabularies 2) modalities 3) generic statements, and 4) argumentation.

# ジャンル、ディスコース群、スタイルの関係について

## ——フェアクラフ理論による社説とコラムの批判的ディスコース分析——

石 上 文 正

### 0. はじめに

N. フェアクラフ (2012: 311) は、「テキストの全体的構造」は「ジャンルによって決定される」と述べ、さらにジャンル、ディスコース群、スタイルの間に複雑な関係がみられるとも述べている。本稿の目的は、フェアクラフ (2012) の批判的ディスコース分析理論を用いて、実際のテキスト (『日本経済新聞』の社説とコラム) を構造的視点から分析し、「ジャンル」が、「ジャンル」を含めて「ディスコース群」、「スタイル」、つまりテキスト全体を構造化しているかを明らかにすることである。さらに、同社説とコラムの特徴も考察する。

### 1. フェアクラフ理論について

フェアクラフ (2012: 314) 理論において、「ディスコースの秩序」という重要概念があり、それは、「ジャンル」、「ディスコース群」、「スタイル」によって構成されている。フェアクラフ (2012: 34-5) は、テキストにおいて、「ジャンル」、「ディスコース群」、「スタイル」は3相を形成し、それぞれを「行為的意味」、「表象的意味」、「アイデンティフィケーション的意味」という「3相の意味の観点から見る」ことができるという。

フェアクラフ (2012: 36) はこの意味の3相の関係について、「それらのあいだの関係は、ずっと微妙で複雑 (complex) なもの、つまり弁証法的関係である。」と述べ、さらに、「それぞれが他を『内在化』している」とも述べている。

紙幅が限られているので、フェアクラフ (2012) 理論については詳しく述べる余裕がないが、石上 (2015)、石上 (2016) が、フェアクラフの理論や概念について説明している。

### 2. 分析対象

分析対象の一つは、『日本経済新聞』の第1面の「春秋」というコラムである。これは毎朝刊に掲載される短評・時評である。もう一つは、同じく『日本経済新聞』の「社説」である。分析をおこなうテキストの「春秋」は、2014年、11月22日、「社説」は、2014年、11月23日のものである。なお、本稿で「春秋」および「社説」と言及するときは、この特定のテキストを指す。

2014年の11月21日に衆議院解散が決まり、両テキストは、選挙がテーマになっている。この二つのテキストの共通点は、同じ新聞社、ほぼ同じ時期、テーマが選挙という点である。

### 3. ジャンルについて

フェアクラフ理論における「ジャンル」というのは、テキストにおいては、「行為的意味」としてあらわれる。ジャンルの同定について、フェアクラフ (2012: 104-6) は、「活動」、「社会的関係」、「コミュニケーション技術」の三つの観点を示している。「コミュニケーション技術」に関しては、両者

は「新聞」という同一の技術が用いられている。

「活動」について、フェアクラフ (2012: 107) は、「一般的に、ジャンルは活動の目的という観点から定義される。」と述べている。では、「社説」と「春秋」の目的はなんだろうか。

「社説」の「目的」を考える手掛かりとして、Fowler (1991: 209) の指摘は有益である。彼は、社説を特徴づけているのは、価値観や信念を提案することではなく、価値観や信念を提案するという発話行為を全面に押し出す「テキスト戦略」を用いる (employ) ことであるという。次に Fowler (1991: 210-11) は、報道記事と比較して、社説の発信源 (source) の声 (voice) が「より目立つ」とし、次の4点に言及している。その声においては、①語彙が感情的 (emotive) で、②話者の主張 (insistence) がモダリティに示され、とくに 'must' が重要な法助動詞としてみなされ、③記述的な命題や諺などの一般的陳述 (generic statements) が示され、それが言及された事柄に当てはまることが想定され、④二つの意味で論争的・議論的 (argumentative) であり、第一に論理的構造およびもしくは物語構造、第二に反駁性 (rebuttal) が認められるという。

③の「一般的陳述」、④の「論争的・議論的」に関しては、「4. ディスコース群について」で扱い、①の「感情的な語彙」と②の「話者の主張」については、「5. スタイルについて」で扱う。以上のことから、「社説」の「目的」に関しては、「ディスコース群」と「スタイル」の考察の後に行う。

### 3-1. ジャンル (一般的) 構造について

フェアクラフ (2012: 311) は、“generic structure”について「テキストの全体的構造あるいは構成のことで、そのテキストが利用するおもなジャンルによって決定される。」と述べている。つまり、テキストを構造づける主たる力をジャンルと考えているようである。例えば、ニュース報道というジャンルにおいて、「ヘッドライン」それに続く「リード」、「本文」という構造が見られ、これが“generic structure”とされている。なお、『小学館 英和中辞典』によれば、“generic”には、生物学における「属に特有な」という意味や「一般的な」という意味がある。フェアクラフ (2012: 311) は、“generic structure”をジャンルとの関係が深い構造としてとらえているので、これを「ジャンル (属) に特有な構造」と考えることができよう。さらに、同構造が特定のジャンルに一般的にみられるという意味も込められていると考えることもできよう。そこで、本稿では、“generic structure”を「ある特定のジャンルに一般的にみられる特有な構造」と考え、これを「ジャンル構造」と呼び、議論を進める。

### 3-2. 「春秋」と「社説」のジャンル構造

新聞の第1面のコラムにはしばしば「起承転結」構造がみられる (鈴木 2010: 57)。「春秋」でも同様に、第1段以外の第2、3、4段のはじめには「▼」が置かれ、このマーカーによって構造が視覚的にも示されている。

「春秋」の出だしは、「人間の脳は楽観主義なのだそうだ。」と、脳科学に関連する一文から「起」こされている。そして、「脳は未来の幸福な出来事を想像した時に最も活性化するという」と、『「期待」の科学』という本に言及した一文で「起」を終え、第2段は「明日への期待が持てれば、人の行動も変わってくる。そう仕向けることが安倍晋三政権の経済政策、アベノミクスの柱の一つだ。」と、「期待」ということばを要<sup>かなめ</sup>として「承」けている。そして、第3段は「衆院が解散になり、事実上の選挙戦が始まった。」と選挙のテーマに「転」じ、最後の第4段は「期待が高いときほど裏切られた時

の落胆は大きいものだ。有権者は安倍政権にどんな審判を下すだろうか。」と「結」んでいる。

このように、「春秋」は、みごとな「起承転結」構造を形成していて、一般的にみられるため、これがジャンル構造と考えられる。書き手は、ジャンル構造を強く意識し、構造に縛られてテキストを織り上げていると考えられるし、読み手も構造を意識して読んでいると考えられる。この種の読みでは、コラムの内容ばかりでなく、「転」の“妙味”や、構造の美しさも読みの対象になっている場合もある。

2014年の11月23日の『日本経済新聞（朝刊）』の社説は、「14衆院選 政策を問う」がテーマで、右上段に比較的大きなポイントで縦書きで示されている。一番大きなポイントで縦書きで示されているのが「経済再生へ『アメ』より改革案を競え」で、囲み記事中央に示されている。これがこの社説の「主張」であろう。さらにこの社説には、「足踏みする『第3の矢』」、「民間の活力を引き出せ」の二つの小題がつけられている。この小題をジャンル構造のマーカーと考えれば、同社説は、次のように三つの部分から構成されていると考えることができる。

第1パートには小題がなく、「降ってわいたような解散・総選挙だが、経済の再生にはどうすればいいのかをあらためて議論する良い機会ともいえる。」という一文から始まり、「痛みの伴わない安直な対策で有権者に幻想を振りまくことだけは願ひ下げだ。」、「『アメ』をすぐ配ることよりも、中長期的な視野に立って経済を強くし、生活を安定させるための改革案を競い合うべきだ。」と、3文で構成されている。

この第1パートの第1文は総選挙の位置づけ、第2文は有権者に対する政党・政治家の姿勢、第3文は「べきだ」ということばに示されているように、社説の「主張」が述べられている。これは、この社説の「要約」と考えることができる。つまり、一般の新聞記事の「リード」に相当する位置づけであろう。

第2パートは、「足踏みする『第3の矢』」という小題の後、10段落が続き、アベノミクスと、それとの関連で日本経済の現状分析が行われている。その順序は、第1、2、3の矢と整然と流れている。

第3パートは、「民間の活力を引き出せ」という小題の後に5段落が続き、「主張」が示されている。

経済紙の「社説」らしく、選挙がテーマだが、その視点は「経済」である。議論は、安倍政権のそれまでの施策、それもほとんどが「アベノミクス」に関するもので、議論の順序も「第1の矢」、「第2の矢」、「第3の矢」である。第1、第2の矢については批判もしているがおおむね肯定的評価がみられる。しかし、第3の矢に関しては、小題にも示されているように、「足踏みする『第3の矢』」という評価である。

このように、小題というマーカーからみた場合、「社説」にもある程度しっかりした構造が認められるので、これを“仮の”ジャンル構造とする。しかし、「春秋」ほど構造化されているとは考えられない。

#### 4. ディスコース群について

フェアクラフが用いる「ディスコース」という概念には、注意が必要である。フェアクラフ（2012: 33）は、「ディスコース（discourse）」と「ディスコース群（discourses）」を区別している。抽象名

詞と可算名詞の違いである。可算名詞の「ディスコース」を複数形として用いる場合には翻訳では「群」を付した。抽象名詞としての「ディスコース」は、「社会生活の要素としての言語や他のタイプの記号現象を意味」し、可算名詞としての「ディスコース群」は「異なった視点もしくは立場から世界の同じ領域を表象している」と説明している。

#### 4-1. ディスコース群の同定およびディスコース群構造について

さまざまなディスコース群を分類、同定することに関して、フェアクラフ (2012:195-6) は、ディスコース群を二つの「要素」、つまり「(a) 世界のある特定の一部分を表象するもの」と「(b) ある特定の視点からその一部分を表象するもの」に分けている。前者は、簡単に言い換えれば「特定の事象」、後者は「特定の視点」となろう。なお、フェアクラフ (2012:196) によれば、前者の「特定の事象」は、テキスト分析においては、「主要な『テーマ』」と考えることができるという。

上記の考えにしたがって、ディスコース群を、1文ごとに詳しく分析すれば、1文ごとに異なったディスコース群として同定することができる場合があるだろう。しかし、「春秋」の場合は、しっかりしたジャンル構造があるので、その構造にしたがって、ディスコース群の同定が可能かを分析する。

「春秋」の第1段は、脳の働きという「特定の事象」もしくは「テーマ」を「米ニューヨーク大学の研究」という科学的な「特定の視点」から扱っている。この段落の最後に「『期待』の科学」という典拠が示され、このなかの「期待」が同コラムの中心的なことばになっている。

第2段では、第1段とは異なったアベノミクスという「特定の事象」が表象され、それは「(アベノミクスという) シナリオは脳科学の研究成果も参考にしているのかもしれない」(カッコ内は筆者、以下同様) という言い回しからわかるように、第1段とほぼ同じ「特定の視点」から解釈している。つまり、第2段は、第1段とは「特定の事象」が異なり、「特定の視点」はほぼ同じであることから、少し異なったディスコースといえる。

第3段は、「衆院が解散になり、事実上の選挙戦が始まった。」で始まり、「特定の事象」が第2段の「アベノミクス」から「選挙」に移行している。読み手は、この一文で、おそらく「転」への移行を感じ取るであろう。そして、上記の文に「この2年のアベノミクスを有権者はどう評価するだろう。」が続いている。これは、興味深い一文である。この一文から「アベノミクス」が第2段と同様、「特定の事象」としての地位を維持していることがわかり、さらに「有権者」の「視点」が導入されている。「有権者」の「視点」ということは、「選挙」の視点でもあるといえる。この第3段においては、「選挙」は「特定の事象」であると同時に、アベノミクスについて考えるときの「特定の視点」でもある。第2段と同じアベノミクスに関する「特定の事象」が表象され、それに対して「(アベノミクスへの)『期待』が冷め始めているようにもみえる」と、脳科学的な「期待」から、有権者の「期待」に“移調”し、さらに、「冷め始めている」というように、非「期待」に反転している。アベノミクスは、有権者の非「期待」という視点から見られていることになる。第3段は、第2段と比較すると、扱っている「事象」は一部重なるが、その「視点」は反転し、否定的になっている。まさに「転」である。

第4段は、「こんどの解散・総選挙に疑問を持つ人も少なくあるまい。」という一文から始まり、特定の事象が「選挙」であることが表象され、さらに「政治資金問題」などのアベノミクス以外の積み残されている課題という「特定の事象」も表象されている。これらの「事象」に対して「期待が高い時ほど裏切られた時の落胆は大きいものだ。有権者は安倍政権にどんな審判を下すだろうか。」と、



第3段の非「期待」が否定的な「視点」である「落胆」ということばで引き継がれ、最終的には、「有権者」と「選挙」の「視点」から「特定の事象」に「審判」がくだされるであろうと、結ばれている。

上記のディスコース群の「事象」と「視点」に関する分析を表1にまとめた。

表1 「春秋」のディスコース群構造

	特定の事象 テーマ	特定の視点
第1段（起）	脳の働き	科学的（期待）
第2段（承）	アベノミクス	科学的（期待）
第3段（転）	選挙とアベノミクス	有権者・選挙（冷めた期待）
第4段（結）	選挙とアベノミクス以外の課題	有権者・選挙（期待への落胆）

表1から、次のことが明らかであろう。第一に、いずれの段落間においても「特定の事象」と「特定の視点」の二つがそろって同じであることがないので、すべてが異なったディスコース群であるといえる。つまり、「春秋」は四つの異なったディスコース群で構成されている。第二に、起→承→転→結と推移するときに、前の段落の「特定の事象」もしくは「特定の視点」のいずれか一方が引き継がれている。第三に、第1段と2段、そして第3段と4段は、それぞれ共通性が高いので、「春秋」は、「起承」と「転結」に大きく分けることができる。第四に、「期待」がすべての段落に登場している。

「春秋」というディスコースが四つのディスコース群から構成されていることは、ある意味で同ディスコース群全体が分解の危険性を秘めていると考えることが可能であろう。それを食い止め、まとまりのあるディスコースにしているのは、おそらく上記の第二、第三、第四によって結束性や一貫性が保たれているからであろう。

上記の第三で同コラムは2分割することが可能であることを指摘した。テーマが異なっているのに、なぜ一つのディスコースとして考えることができるのかといえば、第1段の「脳の働き」は、第2段の「アベノミクス」を説明するための準備であると考えることによって、二つの段落の関係が強いものと解釈でき、その結果二つの段落は、一つのディスコースを形成していると考えられることも可能であろう。

第3段は、「選挙」という事態における「アベノミクス」という課題、第4段は、「アベノミクス以外」の課題がテーマであり、二つは、現代日本が直面している「政治課題」がテーマであると考えられることができる。この課題を「有権者」の「視点」からみているので、二つの段落は一つのディスコースと考えることもできる。

以上の分析から、「春秋」のジャンル構造とディスコース群構造がほぼ一致していることが確認できた。なお、フェアクラフは「ディスコース群構造」という術語は使用していない。

「社説」は、すでに指摘したように、三つのパートに分かれていると考えられる。それは、形式的な根拠にもとづいている。小題が二つあって、最初の小題の前が第1パート、その後が第2パート、二つ目の小題の後が第3パートということになる。しかし、ここでは、ディスコース群の分析を通じて、その構造について改めて考えてみる。なお、ここで行うディスコース群の分析は、表2としてまとめた。

第1パート（第1ディスコース群）は、第1段のみである。それは「降ってわいたような解散・総

表2 「社説」のディスコース群構造 (5 分割案)

ディスコース群	段落 (行為的意味)	特定の事象・テーマ 表象	特定の視点 (行為的意味) (アイデンティフィケーション的 意味)
第1 ディスコース群	第1 段 (正当化、要約)	選挙、経済再生	経済対策に取り組む覚悟や真摯な 姿勢の必要性
第2 ディスコース群	小題	「足踏みする『第3の矢』」	
	第2 段 (正当化)	アベノミクス	議論する意義づけ
	第3 段 (準備)	議論	論点整理
	第4 段 (準備)	議論	論点整理
第3 ディスコース群	「振り返って」 (マーカー) 第5 段	安倍政権の経済政策運営	評価
	第6 段	アベノミクス「第1の矢」	評価 (プラス面)
	第7 段	アベノミクス「第1の矢」	評価 (マイナス面)
	第8 段	アベノミクス「第2の矢」	評価
	第9 段	アベノミクス「第3の矢」	良くない評価
	第10 段	アベノミクス「第3の矢」	良くない評価
	第11 段	アベノミクス「第3の矢」	主張
第4 ディスコース群	小題	「民間の活力を引き出せ」	
	第12 段	政府の仕事	民間活力を引き出す、主張
	第13 段	政府の仕事	民間活力を引き出す、主張
	第14 段	政府の仕事	民間活力を引き出す、主張
	第15 段	政府の仕事	民間活力を引き出す、主張
第5 ディスコース群	第16 段 (まとめ)	経済再生策	有権者・次世代・選挙

選挙だが、経済の再生にはどうすればいいのかをあらためて議論する良い機会ともいえる。」という一文で始まっている。この第1文には、解散・総選挙の必然性に疑問を呈しながらも、「経済再生」のための「議論」の「良い機会」として位置付けている。まず、選挙を議論することを意義づけ、それに続く社説が行う「経済の再生」のための「議論」を行うことを「正当化する」という行為的意味としても考えることができる。

第1段の第2文は、「痛みの伴わない安直な対策で有権者に幻想を振りまくことだけは願ひ下げだ。」と厳しく政党・政治家を批判している。第3文でも同様の批判が示されている。結局、政治家・政党は経済政策にしっかり取り組む覚悟や真摯な姿勢が必要であるという「特定の視点」から、「選挙」「経済再生」という「特定の事象」について述べている。この段落は、大きなポイントで表記されている題目の「経済再生へ『アメ』より改革案を競え」を3文で述べているのである。すでに指摘したように、このディスコース群は、内容的にもそして行為的意味としても「要約」であり、一般の新聞記事の「リード」である。



第2パートは、「足踏みする『第3の矢』」という小題から始まり、第2段（第2パートでは第1段）は、「7～9月期に予想外のマイナス成長となるなかでの総選挙だけに経済が大きな争点になるのは間違いない。とりわけ安倍晋三首相が推し進めてきたアベノミクスの是非が問われるのは当然だろう。」という2文で構成されている。第1段では、「経済再生」を「特定の事象」・「テーマ」としたが、第2パートの第1段では、それをさらに絞り込んで「アベノミクス」を「特定の事象」にすることを正当化し、同テーマについての議論をすることを意義づけている。

第3、4段は、本格的な議論や主張をする前の「準備」もしくは「論点整理」として位置付けられているようだ。第3段では、「懸念されるのは、経済悪化の『罪』の押しつけ合いや、おカネをどう配分するかの議論に終始することだ。」というように、不毛な議論はすべきでないと言及をさし、さらに「野党は経済指標の悪化を奇貨として、十把ひとからげにアベノミクスを否定することに全力をあげそうな気配だ。」と、アベノミクスを全面否定することに否定的な見解を示している。「十把ひとからげに」という表現に書き手の否定的な心的態度が示されていると考えられるからだ。第4段では、「消費税増税や景気悪化の悪影響を受けた人々への配慮は必要だ。」とか、財政や社会保障費の問題をしつかり「議論をしなければ政治家として無責任である。」というように、第3、4段では、「議論」すべきことと、してはいけないことが提示されている。つまり、「特定の事象」・「テーマ」は、「議論」であり、その「特定の視点」は、「準備」「論点整理」であろう。これらはまた行為的意味として考えることもできる。

第5段は、「振り返って、安倍政権の2年間の経済政策運営をどう評価すべきだろうか。」という1文のみである。この文頭の「振り返って」によって、今までの文章の流れが、方向を変える印象があるので、これは、一種の新しいディスコースの開始のマーカーの役割を担っていると思われる。また、「特定の事象」は「安倍政権」の「経済政策運営」であり、その「特定の視点」は、「どのように評価すべきだろうか」に示されているように、「評価」である。「評価」は、フェアクラフ理論では「アイデンティフィケーションの意味」として考えることができる。なお、「評価する」という行為と考えれば、行為的意味と考えることも可能であろう。いままでの議論からもわかるように、表象的意味は、行為的意味、アイデンティフィケーションの意味と深く関わっていることがわかる。

第6段は、「金融緩和というアベノミクスの『第1の矢』」が「特定の事象」で、その「特定の視点」は、「評価」であり、とくにプラスの面が指摘されている。第7段も、「第1の矢」が「特定の事象」で、「特定の視点」は前段と同じく評価であるが、「負の面」が示されている。第6段と7段は、「第1の矢」と「評価」という点で共通しているので、一つのディスコースを形成しているといえよう。

第8段は、「機動的な財政政策という『第2の矢』」が「特定の事象」で、その「視点」も前ディスコースと同じく「評価」である。第8段では、良い点も悪い点も指摘されている。

第9段は、「最大の問題は『第3の矢』である成長戦略が物足りないことだ。」という文で始まっている。この文からわかるように、書き手は「第3の矢」に対して良い評価を与えていない。このディスコースの「特定の事象」は「第3の矢」で、その「視点」は、「評価」である。第10段も、第9段とほぼ同じなので、第9段と第10段は一つのディスコースを形成していると考えられる。

第11段の「特定の事象」は、前ディスコースと同じく「第3の矢」であるが、「安倍首相や自民党の候補者に求められるのは、今後実行する『第3の矢』の中身や時期を明示することだ。野党にもア

ベノミクス批判だけでなく、独自の成長戦略をはっきりと示してもらいたい。」という2文の文末表現から明らかなように、「主張」が示されている。これも一種の「視点」と考えられる。後述するように文末表現はモダリティと関係し、スタイルの問題であるため、この「主張」は、アイデンティフィケーション的意味と考えることができる。さらに、「主張する」わけであるから、行為的意味として考えることも可能である。

以上のことから、第5段から第11段までが、ほぼ「アベノミクス」が「特定の事象」で、「評価」の「視点」は、第5段から第10段までであることが明らかになった。「評価」の後に「主張」が置かれているのは、自然の流れであろう。このことから、第5段から11段までは、一つのディスコースとして同定することも可能であろう。

第11段の後に、小題「民間の活力を引き出せ」が置かれ、新しいディスコースが始まると考えられる。

第12段は、「成長戦略の基本は民間の活力を引き出すことであり、その環境を整えるのが政府の仕事だ。」という一文からはじまり、これはまさに、小題と同じ内容である。「特定の事象」は「アベノミクス」の一般的表現である「政府の仕事」であろう。そしてその仕事は、「民間活力を引き出す」とい視点からみた仕事であろう。その具体例として、12段では、「法人税の大幅な減税」、技術の進歩に合った「法や規制」の構築などによって「現状も打破すべきだ。」と「主張」をしている。

第13段では、第12段で述べた具体的提案をさらに追加している。たとえば、「FTA」や「TPP」の促進・実現、「女性や外国人の雇用」の増加等である。この13段は、第12段の続きとして位置付けられる。同じく、第14段も第12段の続きで、「財政健全化計画を策定」を訴えている。第15段も同様に、第12段の続きで、「増収策をどう実現していくか」、「膨らむ一方の社会保障費をどう抑えていくか」も示す必要があることを訴えている。このように第12段から第15段にかけて、具体的な対策の「主張」が行われ、ほぼ同一のディスコース群であることが明らかである。

第16段は、最終段落のためか、それ以前の段落とは異なったディスコースとして位置づけられる。この段落は、「各党が示すべき経済再生策は目の前の有権者だけでなく、次世代の利益にもつながるものでなければならない。」と、1文で構成されている。「特定の事象」は、それ以前とほぼ同じ「経済再生策」だが、その「視点」は「有権者」であり、さらに「次世代」という長期的な「視点」も採られている。この第16段以前ではほとんどが経済政策、アベノミクスがテーマであったため、本来の「選挙」が背景化されていた。おそらく、最終段落ということで、「選挙」に焦点化することによって、いままでの経済再生策という「特定のテーマ」と「選挙」という“本来”のテーマを結合して、同社説の議論を正当化していると考えることができよう。このように、最終段落は、「結論」「まとめ」といった役割を担っている。これを「まとめあげる」という行為と考えれば、行為的意味でもある。

以上の分析から、「社説」は、表2に示したように五つのディスコース群で構成されていることがわかった。これは、すでに議論した小題を基準にしたジャンル構造とは異なっている。ただし、その違いは、第4段と5段の間に断絶を認めるか否か、最終段落を独立させるか否かという点にある。

第2、3、4段は、第5段以降の準備・論点整理のためのものなので、これらは一つのディスコース群を形成しているとも考えることも自然であろう。ただ、ディスコース群の定義を細かく、厳密に適用するならば、第4段と5段の間に断絶を認めることも可能である。

最終段落は、最初に提示したジャンル構造では、それ以前のディスコース群に入っていた。しかし、第1段落を一つのディスコースとして認めた以上、全体のまとめの役割を担っている最終段落も、独立したディスコースとして考えたほうが、整合的であると考えられる。以上から、ディスコース群の定義という点から考えると、「社説」は「主張」を行うための「議論」によって秩序づけられ、三つ、細かく分ければ五つのパートによって構造化されている。

#### 4-2. 「一般的陳述」について

Fowler (1991:211) が言う「一般的陳述」は、すべきことや必要なことを主張するのではなく、「記述的な命題 (descriptive propositions)」である。この一般的陳述は、「春秋」に三つみられるが、「社説」にはみられない。

「春秋」の三つの一般的陳述(命題)は、①「人間の脳は楽観主義なのだそうだ。」(第1段)、②「脳は未来の幸福な出来事を想像した時に最も活性化するという。」(第1段)、③「期待が高い時ほど裏切られた時の落胆は大きいものだ。」(第4段)である。命題②は、①を少し具体化した命題であり、基本的には同じものと考えられる。いっぽう命題③は、命題①、②が否定されたときの命題として位置づけられる。

命題①は文頭にあり、命題②は第1段の第3文である。命題③は、最後から二つ目の文で、この命題を受けて「有権者は安倍政権にどんな審判を下すだろうか。」と締めくくられている。

Fowler (1991:211) は、この一般的陳述は探求(enquiry)という開放性に対して、閉鎖性という「安心感(comfort)」を与える、権威あるもの(authoritarian)であるという。「春秋」の一般的命題は、科学的知見として冒頭に二つ配され、さらなる「探求」・疑問等への開放性を排除・閉鎖し、論旨の基礎固めをしている。

このコラムでは、まず冒頭の二つの命題を科学的真理として提出し、最後はその真理に反した場合はどうなるであろうかと、読者に問いかけてコラムを締めくくるという構造がみられる。

#### 4-3. 論争性・議論性について

「社説」では、論点整理→アベノミクスの評価→主張という流れがあり、大きな「議論構造」が認められ、さらに「～からだ」、「このため」などの理由を示すことばが用いられ、「議論」が行われている。いっぽう、「春秋」には「議論構造」はみられない。

「物語性」は、さまざまに定義されるが、そのなかの要素として「時間的に秩序づけられ」(アダン 2004:19) ていることが重要であるが、「春秋」と「社説」にはこの「時間的秩序」がないので、「物語性」は希薄であると言わざるを得ない。

「社説」には「反駁性」が認められる。まず、第3の矢に対して「大きな前進があったとは言えない。」(第9段)とかアベノミクスに対しては「いつまでも使い続けるわけにはいかない。」(第10段)などの文章が「反駁性」を示している。いっぽうの「春秋」には「反駁性」がほとんど認められない。

以上のことから、「テキスト戦略」としての「議論性」に関しては、「社説」のほうが「春秋」より多く用いられていると考えられる。

#### 4-4. 社会的行為者である「有権者」の表象について

本節では「有権者」がいかに扱われているかを考察してみる。「社説」と「春秋」の間に、差が認められるのだろうか。

「有権者」は、フェアクラフ（2012）理論で言えば、「社会的行為者」である。この社会的行為者は、ディスコースのなかで選択され、さまざまに表象される。ここでは、とくに下記の選択を中心に考えてみる。

「作用的（activated）」／「被作用的（passivated）」（フェアクラフ 2012：219）

上記の選択の違いについて、フェアクラフ（2012：219）は次のように説明している。

社会的行為者が、過程における〈行為者〉（大まかに言って、ものごとを行ったり、ものごとを引き起こしたりする者）か、〈被行為者〉あるいは〈受益者〉（大まかに言って、過程によって影響を受ける者）か。

「春秋」における「有権者」は次のように描かれている。

「この2年のアベノミクスを有権者はどう評価するだろう。」（第3段）

「有権者は安倍政権にどんな審判を下すだろうか。」（第4段）

「有権者」は、「評価」し、「審判を下す」存在として描かれている。フェアクラフ（2012：219）理論では、「作用的（activated）」に表象されているということが出来る。つまり、「評価」や「審判」の対象者・物に対して作用を行い、影響を与える存在として表象されている。さらに、この場合の作用を及ぼす対象は政治家、政党であり、通常は「権力」そのものである。つまり、「有権者」は選挙という場においては、通常の権力そのものにさえ「審判を下す」「権力者」として位置づけられているのである。「春秋」では、このように「権力者」としての「有権者」が表象されていることになる。「社説」では、「有権者」が次のように描かれている。

「痛みの伴わない安直な対策で有権者に幻想を振りまくことだけは願い下げだ。」（第1段）

「有権者も甘い言葉だけささやくような候補にはノーを突きつけなければならない。」（第4段）

「各党が示すべき経済再生策は目の前の有権者だけでなく、次世代の利益にもつながるものでなければならない。」（第16段）

第1段では、政治家・政党が「有権者」に「幻想を振りまく」とされているので、「有権者」は「被作用者」として表象されていると考えられる。さらに、「願い下げだ」と考え、述べているのは、おそらく、社説の書き手であるから、ある意味で、「有権者」の代わりに、政治家に抗議していると考えられるだろう。この第1段の「有権者」は「被作用者」として表象されていると考えられる。

第4段の「有権者」も、第1段の「有権者」とほぼ同じように表象されている。候補者が、「有権者」に「甘い言葉をささやく」ので、その影響を受けると考えれば、ここでも「有権者」は「被作用者」



として表象されていることになる。さらに、書き手が、「ノーを突きつけなければならない。」と、「有権者」に要求しているのである。つまり、書き手によって要求される「被作用者」としても位置付けられているのである。

第16段では、「各党」が「有権者」に「経済再生策」を示すので、やはり「被作用者」として表象されているといえよう。

フェアクラフ（2012：225）は、この「被作用者」について「社会的行為者がおもに被作用化されている場合、強調されるのは、彼らの過程への従属、彼らが他者の行為によって影響を受けていることなどである。」と指摘している。

現実社会の有権者が、同じ新聞の「春秋」と「社説」というディスコース空間では、正反対に表象されている。「春秋」では、有権者を、権力者を上回る権力者として表象されているいっぽう、「社説」では被作用者、つまり「春秋」との比較でいえば、“弱い”社会的行為者として表象されている。

## 5. スタイルについて

フェアクラフが「スタイル」ということばを用いるとき、私たちが抱いている概念とは大きく異なっているので注意が必要である。「スタイル」は、「テキスト」のレベルでは「アイデンティフィケーションの意味」として理解される。たとえば、生徒が先生に「おはようございます。」という挨拶をするとき、敬体を用いているので、先生は「目上」で自分（生徒）は「目下」であるというアイデンティフィケーションの意味を示していることになる。

フェアクラフ（2012）が「スタイル」の問題として重視しているのが「モダリティ」「評価」の問題である。これらは、書き手・発話者自身が、自分の文を信じているのか、たんにそのように思っているのか、また、そうすべきであると考えているのか、という文に対する『心的態度 (commitments)』、『姿勢 (attitudes)』、『判断 (judgements)』、『スタンス (stances)』と関係するもの（フェアクラフ、2012：241）である。

### 5-1. 「主張」表現およびスタイル構造について

本節では、スタイルに関わる「話者の主張」をモダリティ等との関連で考察する。ここで言う「主張」とは、Fowler（1991：211）が言及している英語の‘must’などの助動詞に近い表現である。

フェアクラフ（2012：318）のモダリティ概念は、ハリデー（2001：561）のモダリティ概念の影響を受け、「定言的〈言明〉と〈否定〉の中間にある」と、その「中間性」を基本にしている。

さらに、フェアクラフのモダリティ論は、英語を基にしているので、そのまま日本語には適用できない。モダリティの研究家である益岡（1991：30）はモダリティは、「日本語にとっては重要な意味を持つ存在である。」と指摘し、その理由として「日本語は判断・表現主体の主観的側面が高度に文法化された言語」であると述べている。つまり、日本語文法においては、モダリティの持っている重要性が極めて大きいというのである。

日本語学では、モダリティについて研究者によってさまざまな分類法・用語が用いられていることもあって、フェアクラフ理論に適合させるために、どの分類法や用語を用いるのが最適かの判断をしなければならないであろう。この判断は、私の能力を超えるので、本稿ではモダリティそのものに焦点を当てるというよりは、書き手が「主張」を行っている表現を収集し、分析する。それらにはモダ



リティを含む幅広い表現が含まれる。

益岡（2007:2-3）は、文を事態を表す領域と話し手の態度を表す2領域に分け、後者の領域を「モダリティ」とし、「モダリティ」の領域をさらに「判断のモダリティ」と「発話のモダリティ」の領域に分けている。日本語では、モダリティ表現は文末にあらわれる場合が多いので、本稿では文末表現に焦点を当て、モダリティや語彙選択等について考察をすすめる。

英語の‘must’に近い日本語表現は、「～なければいけない（なければならない）」であろう。益岡（2007: 146-3）の分類では、これらは「判断のモダリティ」の下位分類である「価値判断のモダリティ」の「必要」に分類されている。そこで、本稿では、「主張」に関するモダリティ表現は、益岡（2007: 146-3）が示している「価値判断のモダリティ」を参考にして収集する。

文末において、「主張」が行われているか、もしくは暗示されている文を「春秋」と「社説」で収集した。「春秋」には、文末に「主張」を示す表現を見出すことはできなかったので、「社説」につい

表3 「社説」の文末にみられる「主張」表現およびスタイル構造

ディスコース群	段落	文 末
第1 ディスコース群	第1 段	ことだけは願い下げだ。 競い合うべきだ。
第2 ディスコース群	第2 段	是非が問われるのは当然だろう。
	第3 段	——
	第4 段	配慮は必要だ。 議論をしなければ・・・無責任である。 ノーを突きつけなければならない。
第3 ディスコース群	第5 段	——
	第6 段	——
	第7 段	——
	第8 段	——
	第9 段	——
	第10 段	——
第4 ディスコース群	第11 段	求められるのは、・・・明示することだ。 示してもらいたい。
	第12 段	政府の仕事だ。 投資を呼び込むうえで欠かせない。 現状も打破すべきだ。
	第13 段	急ぐ必要がある。 待ったなしだ。
	第14 段	不可欠である。
	第15 段	示す必要がある。 重要だ。
第5 ディスコース群	第16 段	つながるものでなければならない。

\* 「——」は「主張」表現がみられないことを意味する。

てのみ表3としてまとめた。

表3に示したように、「主張」表現が「社説」には多く見出すことができた。とくに、第4ディスコース群では、すべての段落に「主張」表現が認められた。さらに、「主張」表現が各ディスコース群の最後の段落（第1、4、11、15、16段）で必ず用いられている。これを各ディスコース群の構造マーカーと考えれば、スタイルに基づいた「スタイル構造」が、ディスコース群構造と類似していることになる。なお、フェアクラフ（2012）には、「スタイル構造」という概念はみられない。

上の「社説」の表現構造の特徴は、次のように説明がつかうだろう。まず、各ディスコース群の最後、「主張」表現が用いられていることは、それ以前の段落ではそれ以外の事態や事実の陳述などが行われていると考えられる。とくに、この傾向は第3ディスコースに強い。たとえば、第6段（第3ディスコースの第2文）は、「安倍政権登場前の日本経済の最大の足かせは超円高だった。」ではじまっている。このように、まず事実の陳述を行い、それを基にして自説を主張するという流れがあると考えられる。

この各ディスコース群ごとの構造が、「社説」全体の構造にも反映している。事実上の最後のディスコース群である第4ディスコース群以前では、さまざまな事実に関する評価や陳述が行われ、それを基にして、事実上の最終ディスコース群に、「主張」表現が多く配されている。このように、各ディスコース群、そして全体のディスコース群に、同様の「スタイル構造」がみられる。たしかに議論構造としては、自然な構造であろう。

## 5-2. 「春秋」における「やわらかい」表現について

「社説」には、「主張」という「強い」表現が多くみられたが、「春秋」を特徴づける表現はなんだろうか。おそらくそれは、「やわらかい」表現といえるものであろう。益岡（2007：144-46）は「判断のモダリティ」の下位カテゴリーを「真偽判断のモダリティ」と「価値判断のモダリティ」に2分し、前者は「断定」と「非断定」という対立からなっているという。筆者が考えている「やわらかい」表現とは、この「非断定」のモダリティを含むさまざまな表現である。この「非断定」は、「定判断」と「不定判断」に大別され、前者は「断定こそできないもの何らかの判断は下す」が、後者は「真偽の判断がまったく下せない」とされている。

なぜ「やわらかい」という表現を用いたかの理由は、日本語学の森田（1998）からのヒントによる。森田（1998：121）によれば、日本人は、「外人間に対しては言葉にクッションを設けて、できるだけ断定的態度を避けようと」し、「推量」などの表現技法は、「人間関係を和らげ、コミュニケーションを円滑にする一種の潤滑油として重要な役割を果たしている」と述べている。つまり、「非断定」も「人間関係を和らげる」と考えられるため、「やわらかい」表現と考えたのである。

なお、「春秋」には、「社説」に多くみられた「価値判断のモダリティ」は一つしかみられなかった。表4に、筆者が「やわらかい」表現と考えている文末を示した。

「春秋」は18文で構成され、そのうちの9文の文末で「やわらかい」表現が用いられている。「社説」と比較すると「主張」が抑制されていることがわかる。スタイル構造に関しては、第1段では「証拠性」の定判断、第2段では「蓋然性」の定判断、第3段では「断定保留」の定判断、第4段ではモダリティ表現の混合がみられ、さらに「不定判断」が初めて現れる。このように、段落ごとのモダリティが異なり、ある程度、スタイル構造が認められ、同構造は、ジャンル構造、ディスコース群構造と同

じである。

表4 「春秋」の文末における「非断定」を中心とした「やわらかい」表現

段 落	「やわらかい」表現	モダリティ
第1段	なのだそうだ。	「真偽」・定判断・証拠性
	最も活性化するという。	「真偽」・定判断・証拠性
第2段	参考にしているのかもしれない。	「真偽」・定判断・蓋然性
第3段	どう評価するだろう。	「真偽」・定判断・断定保留
	冷め始めているようにもみえる。	——
第4段	疑問を持つ人も少なくあるまい。	「真偽」・定判断・断定保留
	リセットされてしまうのか。	「真偽」・不定判断
	落胆は大きいものだ。	「価値」・適当
	どんな審判を下すだろうか。	「真偽」・不定判断

\* 「真偽」は「真偽判断のモダリティ」、「価値」は「価値判断のモダリティ」を示す。

### 5-3. 「感情的な語彙」について

フェアクラフ (2012: 249-50) においては、「感情」は「スタイル」の問題として言及されているので、本稿でもそれに従って、この節で考察する。ここでいう「感情的」とは、比喩などを用いて、誇張・強調がみられる表現のことである。

「社説」において、筆者が「感情的な語彙」と感じた表現は次のとおりである。「痛みの伴わない安直な対策で有権者に幻想を振りまくことだけは願ひ下げだ。」(下線は筆者、以下同様) (第1段) 『アメ』をすぐ配ることよりも」(第1段)、「経済悪化の『罪』の押しつけ合い」(第3段)、「有権者も甘い言葉だけささやくような候補にはノーを突きつけなければならない。」(第4段) このように、第1～4段という初めに集中し、比喩的で、しかも具体的・身体的な表現が特徴である。

いっぽう、「春秋」には「感情的な語彙」はみられなく、「社説」とは対照的である。「社説」においては、「感情的な語彙」は「主張」を強める働きがあると思われる。「春秋」では、「主張」は抑えられる傾向にあるため、「感情的な語彙」も抑えられていると考えられる。

## 6. ジャンルの同定について

すでに「3.」で指摘したように、ジャンルの同定については、「活動」と「社会的関係」が判定の鍵になる。さらに、フェアクラフ (2012: 107) が述べているように、「ジャンルは活動の目的という観点から定義される」。表2、3から明らかなように、「社説」では「主張」が構造形成でもっとも重要な働きをしていると考えられることから、「社説」の目的は「主張」であると考えられる。このことから、「社説」のジャンル構造は、「主張」を中心に構造化しているディスコース群構造とスタイル構造とほぼ同じであると考えられることができる。

「春秋」は、Fowler (1991: 209-11) の「テキスト戦略」と関わる4点に関しては、「社説」とは、正反対の戦略を採っている。つまり、「主張」が「目的」ではないことまではわかった。しかし、今回の分析では、「春秋」の「目的」を確定することはできなかった。

次に、「社会的関係」についてであるが、「社説」の「主張」は、だれに向けてなされているのだろうか。読み手は基本的には購読者であろうが、「主張」の“矛先”は、その強い感情的な語彙選択や用いた表現から考えて、主に、政府・与党に向けられていると考えられる。これは、新聞社と政府・

与党の間のディベートを、一般読者が視聴しているという構図である。

フェアクラフ (2012: 113) は、「社会的関係は、『権力 (power)』と『連帯 (solidarity)』、すなわち、社会的階層と社会的距離という二つの位相で変化するということである。」と述べている。「社説」が、「主張」を行おうとする前提には、言論世界（という社会的階層世界）においては、書き手（新聞社）には、「パワー」があるというアイデンティティをもっていると考えられる。また、「社説」は、強い表現を戦略的に用いていることから、「連帯」を求めるのではなく、「社会的距離」をしっかりと保つことを目指しているようである。

「春秋」は、「社会的関係」についても「社説」とは正反対である。「春秋」では、有権者、つまり読者は権力者を上回る権力者として表象されている。さらに「春秋」は、読者に向かって、直接「〇〇しよう」とか「〇〇すべきである」と語りかけず、「やわらかい」表現を多く用いていることから、読者との「連帯」を深めようとしているように思われる。

「社会的関係」という点において、「春秋」では、読者という人間、「社説」は、政府・与党という非人間との関係が強くみられる。

## 7. おわりに

本稿では、「社説」と「春秋」において、ジャンル、ディスコース群、スタイルの構造がそれぞれのテキストにおいてほぼ同じであることを発見した。フェアクラフ (2012:36) が主張している、ジャンルが特定の方法でテキストを構造化するという説に関しては、次のように考えられる。ジャンル構造、ディスコース群構造、スタイル構造が類似しているということは、テキスト全体を構造化するなんらかの力が働いていると考えることができる。すでに指摘したように、ジャンルは活動の目的という観点から定義されるが、「社説」の目的が「主張」であると考えられ、その「主張」が三つの構造に浸透していることが認められた。このことから、少なくとも「社説」においては、ジャンルが、意味の3相を構造化している可能性は否定できない。また、ある別な力が作用して類似の構造を作り上げていると考えることも可能である。わずか2例の分析であり、類似構造構築のメカニズムを解明したわけではないので、フェアクラフの説の正しさを証明したとは考えてはいない。

「春秋」の「目的」に関しては、「確定することはできない」としたが、筆者の仮説としては、「起承」によく描かれる日常や文化的事象を、「転結」の時事問題に導く“ガイド”であるというものである。つまり、新聞の主目的を時事問題の報道とすれば、それに導く「入り口」でもあろう。この点についても紙幅の関係で詳述することができなかった。

「春秋」と「社説」は、一見すると同じジャンルのディスコースと考えることができるかもしれないが、本稿の分析では対極に位置するジャンルといえよう。その二つが、新聞紙上の第1面と第2面、つまり表裏に配置されているのがおもしろいし、「春秋」という「入り口」が第1面にあるのは当然といえるかもしれない。

## 参考文献

アダン、J. M. (2004) (末松壽・佐藤正年訳)『物語論——プロップからエーコまで』白水社

石上文正 (2015)「映画『男はつらいよ』シリーズの批判的ディスコース分析と社会分析——寅さんの両義性について

- 」『人間と環境 電子版』No.9、人間環境大学、1-22 <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009910048>
- 石上文正 (2016)「ミステリー小説をフェアクラフ理論によってメタ分析する」石上文正・高木佐知子 (編)『ディスコース分析の実践——メディアが作る「現実」を明らかにする』くろしお出版、1-35
- 鈴木正道 (2010)「日本の新聞の1面コラム」『言語と文化』法政大学 言語・文化センター、43-58 <http://hdl.handle.net/10114/4796>
- ハリデー、M. A. K. (2001) (山口登・笈壽雄訳)『機能文法概説——ハリデー理論への誘い——』くろしお出版
- フェアクラフ、N. (2012) (日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳)『ディスコースを分析する——社会研究のためのテキスト分析』くろしお出版
- 益岡隆志 (1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (2007)『日本語モダリティ探求』くろしお出版
- 森田良行 (1998)『日本人の発想、日本語の表現——「私」の立場がことばを決める』中央公論新社
- Fowler, R. (1991) *Language in the News: Discourse and Ideology in the Press*, London: Routledge.

## 参考辞典

小西友七他 (1984)『小学館 英和中辞典』小学館

## 分析資料

「春秋」『日本経済新聞 (朝刊)』、日本経済新聞社、2014 年、11 月 22 日

「社説」『日本経済新聞 (朝刊)』、日本経済新聞社、2014 年、11 月 23 日

石上文正 人間環境大学名誉教授